

プレスリリース

色彩で叫ぶ！

ニューヨークを拠点に世界を魅了する 現代美術家、松山智一の個展
松山智一展 FIRST LAST supported by UNIMAT GROUP

2025年3月8日(土)～5月11日(日) 会期中無休

麻布台ヒルズ ギャラリー(麻布台ヒルズ ガーデンプラザ A MB 階)

松山智一展
FIRST LAST
supported by UNIMAT GROUP



展覧会ナビゲーターに俳優の永野芽郁さんが就任
音声ガイドにも挑戦！ 収録を終えてコメントが到着しました

本展の展覧会ナビゲーターに映画・ドラマ、CM など多方面で活躍中の俳優・永野芽郁さんが決定しました。この度、音声ガイドの収録を終えた永野さんより本展に寄せてコメントをいただきました。



©松山智一展 FIRST LAST

<永野芽郁さんのコメント>

近代的な情景に昔のモチーフが混ざり合っていたり、箱に入ったビザが出てきたり…！それが完璧に調和していて、時代を超えた文化の融合を感じます。一枚の絵から受け取れる情報がすごく多くて、絵を見ていると、直感で引き寄せられるモチーフが今の自分の気持ちを映し出しているのかな、と不思議な感覚になりました。今回初めて挑戦した音声ガイドでは、会場にいらっしゃる皆さんが自分だけのお気に入りを見つけるお手伝いをするような気持ちでお話しさせていただきました。鮮やかな色彩とエネルギーに満ちた松山智一の作品の数々から、「色彩で叫ぶ」というのはどうということか、会場で感じていただきたいです。

プロフィール：1999年9月24日生まれ、東京都出身の俳優。NHK連続テレビ小説「半分、青い。」(18年)でヒロインに抜擢され大きな反響を集める。近年の主な出演作品はドラマ『ユニコーンに乗って』(2022/TBS)、ドラマ『御手洗家、炎上する』(2023/Netflix)、『君が心をくれたから』(2024/フジテレビ)、映画『からかい上手の高木さん』(2024)など。2026年には大河ドラマ『豊臣兄弟!』(NHK)に出演予定。

「松山智一展 FIRST LAST」について

本展は、ニューヨークを拠点にグローバルな活躍を見せるアーティスト松山智一の東京で初となる大規模個展で、東京の新たなアートスポット・麻布台ヒルズ ギャラリーで開催されます。四半世紀にわたって現代アートの本場ニューヨークで活動し、いまや世界が目指す次世代のアーティストのひとりとなった松山の日本初公開となる大規模作品15点を含む、約40点を展示。さらにこの機会に、展覧会タイトルにもなる、新シリーズ「First Last」を発表します。松山の特異なアイデンティティを通して捉えたグローバルな現代社会のリアリティを、迫力ある色彩と壮大なスケールの絵画で体感いただける展覧会です。

本展について アーティストからのメッセージ

多様な文化が交錯するニューヨークで 20 年以上活動し、日本とアメリカというルーツを持つ自身にとって東京での展覧会は大きな意味を持ちます。国や言語、文化や世代を超えていま同じ時代を生きる私たちだからこそ感じるがあると思っています。

作品世界に足を踏み入れ、鑑賞者としてだけでなく、作品への参加者、対話者として体験してもらえればと思います。



松山智一 Photo: FUMIHIKO SUGINO

松山智一 | MATSUYAMA Tomokazu

現代美術家。1976 年岐阜県生まれ、ブルックリン在住。絵画を中心に、彫刻やインスタレーションを発表。アジアとヨーロッパ、古代と現代、具象と抽象といった両極の要素を有機的に結びつけて再構築し、異文化間での自身の経験や情報化の中で移ろう現代社会の姿を反映した作品を制作する。パワリーミューラルでの壁画制作（ニューヨーク/米国、2019 年）や、《花尾》（新宿東口駅前広場、東京、2020 年）、《Wheels of Fortune》（「神宮の社芸術祝祭」明治神宮、東京、2020 年）など、大規模なパブリックアートプロジェクトも手がけている。

近年の主な展覧会に、「Mythologiques」（ヴェネツィア/2024 年）、「松山智一展：雪月花のとき」（弘前れんが倉庫美術館/2023 年）「MATSUYAMA Tomokazu: Fictional Landscape」（上海宝龍美術館/2023 年）がある。2025 年 2 月までパリのルイ・ヴィトン財団でも作品を発表している。

代表作品の解説

本展のみどころ

■キャリアを変えたあの大作から最新作まで！日本初公開作品、15 点を含む作品群でその軌跡をたどる

これまで上海やヴェネツィア、ロンドンなどで発表され、海外でしか見ることの出来なかった日本初公開作品や最新作 15 点など、代表作と合わせて約 40 点が展示されます。壮大な絵画や空間に広がる巨大な立体など、松山智一の近年の作品群が東京・麻布台ヒルズ ギャラリーで一堂に会します。

■眩いばかりの色彩の中に多文化の十字路を体験する

松山の絵画から放たれる眩いばかりの色彩は最大の特徴の一つ。自身で作った何千という色のストックが様々な技法によって、キャンバスの上で共鳴します。世界を彩る多様な文化、伝統、宗教、そして歴史的なものや現代的なもの、さらにはハイカルチャーから日常品といった要素は、松山によって無数の色で描かれ、情報化の中で移ろう現代社会の姿を映し出し、混然一体となって鑑賞者を色彩の世界に没入させます。

■新シリーズ「First Last」（後の者が先になり、先の者が後になる）

二極化が進む政治が引き起こす分断、格差や対立、ジェンダー平等のパラドクス、情報操作やフェイクニュースなど、混沌とした現代社会において松山は常に問いを立て続けます。はたして我々は何によって報われるのか？本シリーズでは松山が、アメリカ社会が抱える諸問題を起点に、自身の特異な背景がもたらす独自の視点を通して世界を捉えなおし、芸術によって新たな共感を創り出します。

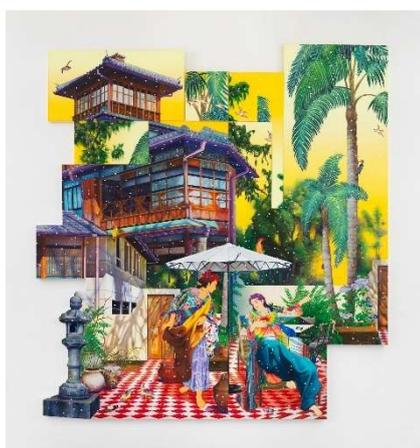
作品介绍



松山智一《Passage Immortalitas》2024
H267 x W470 cm Acrylic and mixed media on canvas

松山作品の特徴は、世界を彩る多様な文化、伝統、そして歴史的なものや現代的なもの、さらにはハイカルチャーから日用品といった要素が、無数の鮮やかな色で描かれ、情報化の中で移ろう現代社会の姿を映し出し、混然一体となって鑑賞者を色彩の世界に没入させるところにある。本作品が属する最新シリーズ「First Last」ではその制作手法がさらに重層化され、二極化が進み分断や対立が多発する現代を、キリスト教などを主題としたルネサンス期や近世の絵画を引用して捉えなおしている。

本作品の人物描写は、ルネサンス期の巨匠ボッティチェリの名作《チェステツコの受胎告知》(1489)を参照している。背景となる室内空間は建築雑誌に登場するインテリア写真を複数組み合わせられていて、その中にポテトチップスの空き袋やハローキティ、中国にルーツがある日本の敷物用織物、緞通（だんつう）など無数の記号的要素が描きこまれている。中央の二人は、いわゆる「受胎告知」のシーンで大天使ガブリエルが聖母マリアに、受胎を告知する瞬間（＝キリストの到来のはじまり）を表しており、美術史の中でも多くの芸術家が向き合ってきた聖書のシーンである。



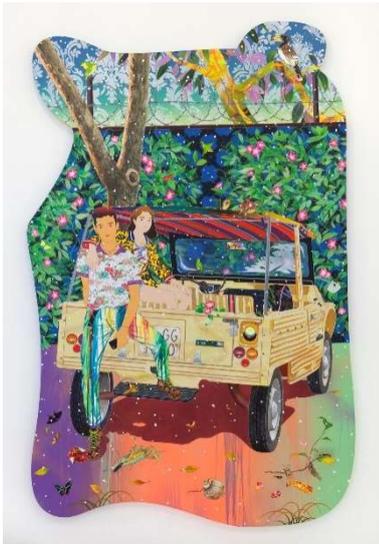
松山智一《Bring You Home Stratus》2024
H330 x W307cm
Acrylic and mixed media on canvas

本作は新シリーズ「First Last」の一作。LAのビバリーヒルズに実在するスペイン植民地時代のリバイバル建築にあるような中庭のイメージと京都に実在する旧三井家下鴨別邸のイメージを、まるで増築するようにつなぎ合わせた、空想上の邸宅が背景となっている。西洋・東洋で大きく異なる富と豊かさの象徴としての建築たちが、本作に描かれている空想世界の中では共存している、それは松山が作品に一貫して描く多様な文化が共存した世界を示唆している。さらに複数の四角形を組み合わせた変形キャンバスが特徴の本作では、奄美の風景を描き続けた孤高の画家田中一村や19世紀フランスのバルビゾン派の画家が描いた植物や木々を引用したイメージも現れ、建築と自然によって豊かさが象徴的に描かれている。作品中央の二人の若者は、バロック期のイタリアの画家アンニーバレ・カラッチの《キリストとサマリアの女》(1594-1595)からの引用で、新約聖書でイエスが井戸の前で出会ったサマリアの女に永遠の乾きの来ない「生ける水」を与え、女がイエスは救世主であることを悟るシーンである。二人の若者の間には、まるで二つの異なる情景を強引につなぎ合わせたようなイメージのズレが仕込まれており、右側の人物の背後にあるたばこケースが演出するように、聖書の物語とは全く異なる役割を与えられているかのようである。



松山智一《We Met Thru Match.com》2016
H254 x W610cm Acrylic and mixed media on canvas

松山絵画を代表するフィクショナル・ランドスケープ（仮想風景）シリーズを象徴する、最初にして最大（横幅6m）の大作。松山の絵画の可能性を拡張し、キャリアのターニングポイントともなった。本作では、松山が敬愛するフランスの画家アンリ・ルソーにインスピレーションを受けた背景を、狩野派や土佐派といった日本の伝統的絵画のスタイルで描いている。また、登場する人物の視線は交差するものの、二人は異なる時空に存在するかのような不思議な距離感を保ち、一人は今まさに文をしたためているところであり、周囲では無関心な鳥たちが獲物をついばみ、宙を舞う。抒情的であるが、どこか浮遊感があり捉えどころのない光景が広がる。タイトルにある Match.com は世界最大の恋愛マッチングサイトであり、人と人との接点やコミュニケーションが変化する現代を示唆する。



1968年に発表され、運搬から若者のレジャーまで高いユーティリティ性で世界的なヒットとなったオフロード車、シトロエン・メアリ。その荷室に腰掛ける二人の人物は、ドライブの途中でリラックスし休憩をとっているかのよう。荷室から顔をみせるのは、正面のフェンスに咲き乱れる朝顔を摘んできたのであろうか。一方、フェンスの上には有刺鉄線が張り巡らされ、地面には捨てられたお菓子のパッケージや様々な種類の虫が無秩序に描かれている。本作もフィクショナル・ランドスケープシリーズの作品であり、二人の洗練されたファッションから大量消費されるお菓子のような日常品、背景や衣服にちりばめられた装飾文様から伝統的な絵画に見られる動植物の描写など、古今東西の記号的要素が画面の情報量を密にする。これから二人はどこへ向かうのであろうか？現代社会において人々が抱く、不確実な未来への漠然とした不安と期待が入り混じった作品である。

松山智一《20 Dollar Cold Cold Heart》2019 H267x W172cm
Acrylic and mixed media on canvas



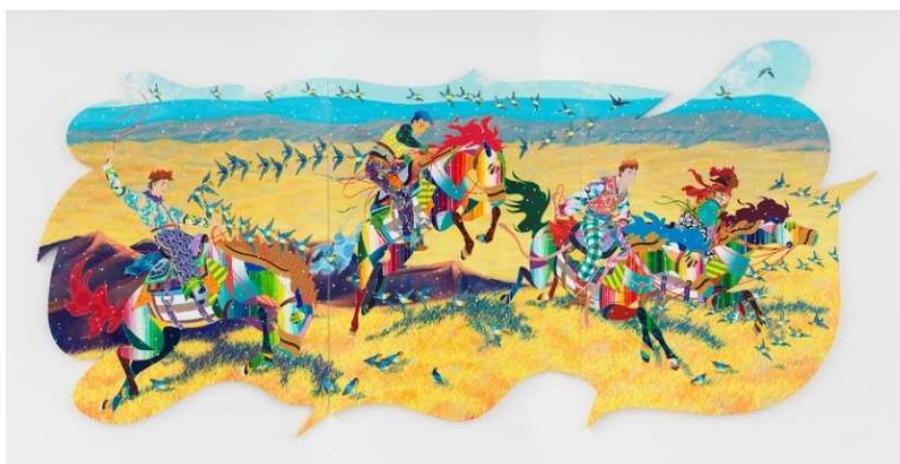
《Keep Fishin' For Twilight》2017
H213.5 x W457.5 cm
Acrylic and mixed media on canvas

あまたの色彩の断片を寄せ集めたように見える松山の抽象画は、記号化された鳥の描写の集積である。これは千羽鶴をモチーフとしており、願掛けや祈りによって物質に精神が宿るといった非西洋的な概念を、松山は西洋によって確立された抽象表現という概念に注入し、内部からの解体を試みる。ニューヨークでの活動を通し、欧米で生まれ発展してきた抽象表現の権威性と理論に衝撃を受けた松山は、だからこそ自らの揺らぐアイデンティティを武器に、新たな抽象表現の構築という美術史への貢献に挑んだのである。



《Cluster 2020》2020 60 x 60 cm (33panels) Acrylic and mixed media on canvas

60cm四方の正方形キャンバス33枚の集積によるこの作品は、新型コロナウイルスのパンデミックにより、世界の大都市がロックダウンに見舞われた時期に完成された。ニューヨークで当初2週間の予定で始まったそれは、延長を繰り返し松山の制作チームは長期の自宅待機を余儀なくされる。松山はメンバー一人一人の自宅にキャンバスと画材を届け、ズームで毎日報告をしながら彼らはベッドルームをスタジオとして制作し、この象徴的な作品が生み出されたのである。クラスター（密集）と名付けられたこの抽象画は、奇しくも千羽鶴の精神が顕在化する作品となった。



松山智一 《The Fall High》2023 H279 x W599cm Acrylic and mixed media on canvas

色鮮やかに描かれた人馬が颯爽と大草原を駆け抜ける、ワイルド・ウエスト（19世紀西部開拓時代）を想起させる騎馬群像である。重要文化財に指定される狩野山雪の《雪汀水禽図屏風》に見られる印象的な鳥の表現を引用し、さらに作品全体に疾走感を与えている。

騎馬像は松山が長年描き続けている重要なテーマの一つであり、本作は其中でも最大の大きさを誇る。ジャック・ルイ・ダヴィッドのナポレオン像や、アメリカを代表するフレドリック・レミントンの絵画においてインディアンとピルグリムが戦う光景、そして日本の騎馬武者像など、あらゆる世界で描かれてきた騎馬像はその作品が制作される文化や政治的背景を端的に象徴する。多くの芸術家が描いてきたこのテーマを松山は換骨奪胎して現代アートというグローバルな言語で捉え直し、騎馬像が歴史的に帯びてきたプロパガンダ的な文脈から解放する。



松山智一 《Dancer》2022
H339 x W360 x D359 cm Stainless Steel

鏡面仕上げされたステンレス製の表面に映り込む空間の動きや色をも作品の一部とし、その設置環境の形や色も作品の中に”引用”する本作は、これまでニューヨークのフラットアイアンプラザなど公共空間で展示されており、松山が考える装置としてのパブリックアートの取り組みを端的に表している。全体像を認識できないぐらい多層的なイメージが自在に舞い素早い動きで宙に軌道を描く姿は、踊り子 (Dancer) そのものの表象ではなく、踊りという身体表現そのものを詩的に探求した結果である。松山は、公共空間におけるアートの意義を考えると、その環境に置かれた人々について考える。動的な身体表現の中に多様な人々の色や形が鏡面に映り込み、角度によっては奥行きを輪郭さえ曖昧になる本作は、古来よりコミュニティーの中に連帯感と特殊な精神状態をもたらした踊りという行為の儀式性を現代に蘇らせる。

[開催概要]

展覧会名	松山智一展 FIRST LAST supported by UNIMAT GROUP Tomokazu Matsuyama FIRST LAST supported by UNIMAT GROUP
会期	2025年3月8日(土)～5月11日(日) 会期中無休(予定)
会場	麻布台ヒルズ ギャラリー(麻布台ヒルズ ガーデンプラザ A MB 階)
開館時間	月・火・水・木・日 10:00～18:00(最終入館 17:30) 金・土・祝前日 10:00～19:00(最終入館 18:30)
チケット料金	2月6日(木)発売 *詳細は公式 WEB に掲載
主催	フジテレビジョン、麻布台ヒルズ ギャラリー、KOTARO NUKAGA
特別協賛	ユニアットグループ
協賛	インバーストメントプロパティコンサルタンツ、ジャヌ東京、ジズホールディングス、 南山堂ホールディングス、Moonshot
協力	MATSUYAMA STUDIO
キュレーター	建畠哲(美術評論家)
展覧会公式サイト	www.tomokazu-matsuyama-firstlast.jp
SNS_アカウント	Instagram: @matsuyama_firstlast X: @FIRSTLAST2025
問い合わせ	azabudaihillsgallery@mori.co.jp
アクセス:	東京メトロ日比谷線「神谷町駅」5 番出口直結 東京メトロ南北線「六本木一丁目駅」4 番出口徒歩 8 分

<プレスの方からのお問い合わせ>

「松山智一展 FIRST LAST 広報事務局」鎌倉・進藤(N&A 内)

E-mail matsuyama.firstlast@nanjo.com

〒153-0051 東京都目黒区上目黒 1-11-6 TEL 03-6261-5784 FAX 03-6369-3596